Teachers' Guide

フィリピンの学び方

わたしたちが、伝えていること、伝えたいこと

2004.1.17～18　教材検討会・報告書

グローバル英語教育研究会（AGEnT）
FARM

もくじ

はじめに 1

フィリピンの何を伝えたいのか 2

テーマ①バナナ　バナナお絵かき合戦 4
JCNC開発教育チーム

NEWマジカル・バナナ 6
地球の木

テーマ②フォトランゲージ 8
「アーウィンくんの1日」「ビナちゃんの1日」
「地球の中間たち」「JICAフォトランゲージキット」他

※アイスブレーキングいろいろ 13

テーマ③環境と開発　海から見える環境と貧困ゲーム 14
草の根援助運動学生班（P2ユース）

テーマ④平和・人権　戦争と女性を考えるワークショップ 16
フィリピン元「慰安婦」支援ネット・三多摩

フィリピンを学ぶ視点～最近の動向から 18

【寄稿】ポピュラーエデュケーションの潮流 20

プログラム内容・参加者一覧 22

関係団体連絡先 23

はじめに

フィリピンの人々と社会のあり方を通して日本の姿や世界の課題を学ぼうとした市民の活動の1つに1980年代のバナナキャンペーンがありました。あまりにも身近になっていた「バナナ」を通して、「貧困」の問題に出会うこのキャンペーンは、高度成長後の市民が「世界の消費者」や「援助国」としてのありかたを問われたはじめての経験であったと言ってもいいでしょう。そこから、当時のマルコス政権下での人権侵害、ODAや日本企業の海外進出がもつ意味を問われることにもなりました。

1986年のエドサ革命後のフィリピンの社会の変化やグローバリゼーションは、日本の市民がさまざまなアジアの人々と出会い共に考えるチャンスを広げたと思います。

そのなかでも、フィリピンの草の根の人々（ People ）やNGOが発信するメッセージは日本の市民に単なる情報を越えたパワーを与え続けています。フィリピンの人々のパワーと社会の現実から学んだ日本の市民グループが、気づいた課題を伝える教材を検討し、日本の人々に伝えたい。これが今の私たちが共に何を学び築くべきかを考えたいと思い企画しました。

教材を開発したNGOや開発教育に関わる市民のアクティビティー実践は、フィリピンと日本の市民の真の交流や連帯の成果といえるものであったと思います。また、全体の進行や内容にはリソースパーソンとして、フィリピンの民衆教育＝Popular Education の担い手であり、アジアのさまざまな成人教育のネットワークをもつボビー・ガルシアさんに企画当初からさまざまなアドバイスを頂き、人を楽しく豊かにつなげるフィリピンの民衆教育実践を紹介していただく機会ともなりました。

また、この機会が国際交流基金アジアセンター草の根交流助成事業助成により実現し、コロンビア大学ティーチャーズカレッジ、SCATセミナールームの御協力により実施する事ができたことを御報告しておきたいと思います。また、ボビー招聘や調整に御協力頂いたJNNE（教育協力NGOネットワーク）、その他多くの方々に感謝いたします。

今回取り上げられなかった教材やテーマ、滞日フィリピン人の視点や経験をも今後は学ぶ必要を感じています。フィリピンと日本そして地球的なつながりの中で、わたしたちが学び続ける仲間でいられるよう願っています。

FARM
福田紀子

フィリピンの何を伝えたいのか

紹介者：福田紀子（FARM）
TEL/FAX:0424－72－6393

●教材紹介●

ねらい

参加者がフィリピンに対して持っている思いを意識化し、共有すること。また、フィリピンをテーマにした教材作成の目的の具体的な指針とすること。

ながれ

①一人ずつ、「フィリピンを通して伝えたいこと」をカードに書き出す
②二人組になり、お互いのカードを紹介しあいながら、共通のものをまとめていく
③全体で、各ペアごとにカードを紹介しながら、模造紙に貼りだしていく。似ているものは重ねていく。

紹介者コメント

今回の参加者はフィリピンに対していろいろな思いを思っているので、それを引き出したいと思った。。ここで出た項目が、教材をふりかえる際の材料になるのではないかと思う。

●アンケートから●

＊良かった。考えさせられた。その後も、あの問いを思い返して、「何を伝えたいのかなぁ」と考えることがある。もう少し時間があって、「なぜ、どういう場面でそう思うのか？」「例えばどんな具体例があるか」など突っ込めたらおもしろかった。

＊今回の研修で最もよかった活動の一つだと思う。多様な人たちが集まって教材を検討する際には、これからもぜひ取り入れたいと思う。最終セッションで分担して、あるいは各セッションのふりかえりとして、伝えたいことが伝えられているかの検証にもう少し時間を割きたかった。

＊自分の中の目的意識をはっきりとすることができてよかった。他の人の伝えたいことを知って考え直す時間はなかった。

＊手法としてはおもしろいと思った。参加人数と時間を考えればちょうどよいボリュームだったと思う。個人的にはもう少し各参加者の思いを一つ一つ拾ってみる時間があってもよいかなぁと思った。

＊フィリピンをテーマに活動するNGOの人たちが、何を伝えたいかを話し合う、とてもよいワークショップだった。

＊フィリピン関係の団体だけの集まりに初めて参加して、とても楽しかった。ワークショップの進め方はいろいろな意見を一人一人がよく聞けるようにファシリテートされていてすばらしかったと思う。

＊やり方や意図はよかったと思うが、結果は今ひとつのように感じられた。

＊自分自身、「アフリカの何を伝えたいか」の参考になった。

●私たちが伝えたい「フィリピン」●

フィリピンの人びと
人々の様子・人々の生活・あなたと同じに夢を持って勉強している子どもがいる・生きていることの実感、感覚が大切・不条理

フィリピン人の明るさ
人々の暖かさ、明るさ・何とかなるっしょ“バハラナ”な感じ・何があっても前向きな明るさ、フレンドリーさ・何事も受け入れる懐の深さ・前向きな気持ちとたくましさ

フィリピンの人間関係
人と人のつながり・人とのつながりの大切さ・人と人との絆がある暮らし・家族のつながりの大切さ・人と自然のつながり

フィリピン人の多様性
多様性・“ハロハロ”な感じ・豊かな多民族文化

フィリピン歴史・社会
歴史と文化の関わりあい・フィリピンの歴史（植民地）・宗教（キリスト教）基盤の社会

フィリピンのバナナ
バナナ・バナナを作る人たち・バナナは黄色くなくても食べられる

豊かさとは何か
経済的な豊かさだけが豊かさではない・物のないことの豊かさ・日本が豊かになる中で失ってきたもの・心の豊かさ・豊かさと貧しさ

日比関係・南北問題
フィリピンと日本のさまざまなつながり（人、モノ、文化、経済等）・自分がフィリピン人と相互依存の関係にあること・フィリピンの問題は私たちの問題でもあり、逆もしかり・貧しさ、飢餓は人がつくったもの・南北問題

世界・異文化との出会い
異文化に触れることの大切さ・固定観念をうち破る・世の中にはいろいんな人、文化、考えがある・私たちは世界の一部である・世界の中の自分の位置・世界は広いってこと・マスメディアでわかることは一片でしかない

テーマ① バナナ

バナナお絵かき合戦

紹介者：吉濱晶子（日本ネグロス・キャンペーン委員会・開発教育チーム）
TEL:03－5273－8160　FAX:03－5273－8667

●教材紹介●

ねらい

「身近な」バナナについての私たちのイメージが限られたものであることに気づく。「バナナ」はフルーツ（実）だけでなく葉・茎・花をもつ植物であること、バナナ＝フィリピン＝プランテーション（＝抑圧？）という図式と共に生活に密着したバナナ文化があること、私たちが認識するバナナは「商品としてのバナナ」でしかないことなどに気づき、その背景に南北問題があることを考えるきっかけとする。

ながれ

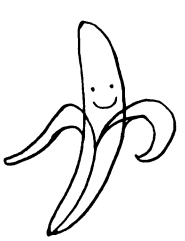
①参加者に紙を配布。各自、バナナの絵やイメージを書き込む。
②バナナについてのクイズ。クイズに正解すると「バナナお絵かきヒント」が獲得できる。クイズは「バナナは何種類？」「原産地はどこ？」「中国語でバナナはどれ？」「バナナの茎の使われ方は？」など。「お絵かきヒント」は、バナナの葉、実、つぼみのイラストと解説が描かれたカード。
③獲得したヒントを参考に、各自、再度バナナの絵を描く。
④正解の発表。バナナの成長の解説。
⑤ふりかえり

紹介者コメント

この教材は「未来を描く」ことを大きな目標にしています。バナナで何かを主張するのではなく、バナナを通して私と世界のつながりを認識し、それを問い、その将来像を描く時間を提供できたらと考えています。

バナナの世界はとても豊かです。農業の起源とされるバナナは人間と様々な歴史を重ねてきました。バナナが教えてくれることは、ステレオタイプな南北問題だけではありません。またバナナを多角的に見つめることで、南北問題としてのバナナも多角的視野をもって捉えられると考えています。

バナナお絵かき合戦は教材の導入部分です。今後バランゴンバナナ・プランテーション・世界のバナナ市場などを教材にすべく、活動中です。



●参加者からのコメント●

GOOD!

＊バナナについてのイメージがふくらんで良かった。

＊「絵を描く」活動は、いろいろな気づきがあって良い。

＊一本のバナナしか知らない子どもたちに、全体を知らせる気づきがあって楽しい。

疑問・反論

＊バナナ・ワールドマップについて詳しく聞きたい。

＊上手に描けた人の勝ちとなっているが、勝ち負けにしなくても良いのかな、と少し思った。

●アンケートから●

＊「タイの人が描くバナナとわたしたちが描くバナナは違う」という発想は、さまざまな文化・風土の違いを考えるうえで応用できそう。わたしたちにしてみれば、それが違うと発見するだけでも、強い気づきがあると思うので、学校の45～50分という授業を考えた場合、より正確に描くための競い合いに時間を割くのは惜しい気がする。なぜ違うのかに時間をかけるほうが、伝えたいことが伝えられるのではないかと思う。

＊絵を描くことで、自分の中の固定観念に気づき、視野を広げる必要を感じることができた。

＊教材づくりのポイントや苦労のアウトラインが聞けて勉強になった。時間がなく、かけあしの説明だったので、次回は実演もあわせて検討を行う時間がほしい。

＊時間の関係もあり、「紹介する」に留まってしまったのがちょっと残念。

＊教材に対するコメント（ダメだし）がほしかった。

テーマ① バナナ

NEWマジカルバナナ

紹介者：中野真理子（(特活)地球の木）
TEL:045－228－1575　FAX:045－228－1578
※NEWマジカルバナナは1500円で販売

●教材紹介●

ねらい

私たちの「買う」「食べる」という行動が世界のどんなところにどんな影響を及ぼしているのか、バナナを通して気づき、問題意識を持つ。私たちの“食べ物を見る目”を問い直すとともに、私たちの食生活が世界の構造にどう関わっているのかを考えるきっかけとする。

ながれ

この教材は以下の5つのユニットからなり、それぞれ独立して使用できるようになっている。

①バナナクイズ、フィリピンクイズ
バナナ、フィリピン、それらをとりまく世界について基本情報を得る。

②カードゲーム「2つのバナナ」
バナナの実物に触れ、ゲームを通して日本で流通している2種類のバナナの生産過程の違いを知る。

③フォトランゲージ、資料写真
写真を丁寧によみこむことで、フィリピンの農村のイメージを膨らませ、フィリピンという国や人々を理解する助けとする。

④ロールプレイ「バナナをつくる人びと」
劇を演じることで、バナナ生産者たちの生活を疑似体験し、消費者の立場と比較することで理解を深める。

⑤ふりかえり「消費者として」
普段気づいていない自分の消費行動をふりかえり、意見を整理、共有し、これからの消費のあり方について考える。

紹介者コメント

時間が足らず、ざっと紹介したぐらいで終わってしまったのが残念。もっとたたいてもらいたかった。

フィリピンの方の眼にはどう写ったのか聞きたかった。ロールプレイのボックスを作ったらどうか、という面白いアドバイスを頂いた。検討してみたい。

前のマジカルバナナ経験者の方から、欲しいと思っていたものが加わって、使いやすくなったようだとのコメントをいただき嬉しかった。是非実際に使ってみての感想をうかがいたい。

●参加者からのコメント●

GOOD!

＊前のマジカルバナナをワークショップで経験したことがあるが、NEWマジカルバナナはいろいろな活動が入っていて素晴らしい！CD－ROMに写真が入っているのも取り組みやすくて良い。

＊バナナを消費する点から教材を考えているところがよいと思った。

疑問・異論

＊3つの写真を選んだ経緯は？

＊なんでもかんでも不買運動につながらないようにするには？不買運動によって仕事を失う人が出てくることに対する問題の教材は？

＊比較だけだと「へぇ」になってしまう？

＊プランテーション全て悪、バランゴンバナナ全て善、というふうに単純化できないのではないか？

提案・改善

＊ロールプレイの道具箱をプロデュースしてみては？

●アンケートから●

＊以前の教材と比較した意見が聞けたのは面白かった。

＊ロールプレイのシナリオを複数の人で検討したのがよかった。子どもがイメージしやすくするための工夫がたくさん出た。また、改訂でどう変わったかを伺えたのはよかった。他の教材も、最初のアイデアから改善してゆく過程を知ることで、何に配慮すべきなのか、あるいは自分たちはどうするかを意識的に考えられる。

＊改善点がよくわかった。時間がなく、かけなしの説明だったので、次回は実演もあわせて検討を行う時間がほしい。

＊以前、フィリピンのバナナについて取り上げた英語の教科書があり、「安いバナナ」から見えてくるものを探ったことがある。その時にこれがあれば、ずっと効果的だったのに、と思った。

＊教材の技術的な議論ももっとできたらおもしろかったと思う。

＊一部しか実践していないので、なんとも言えないが、ロールプレイが、ただロールを決めてシナリオを読むだけで教科書読みと変わらないのでは？

テーマ② フォト・ランゲージ

フォトランゲージ

紹介者：福田紀子（FARM）
TEL/FAX:0424－72－6393

ねらい

NGOの職員やスタディツアーの参加者などが自ら現地で撮影してきた写真は、とても身近な教材である。ここでは、これらの写真を、単に現地状況の説明資料として使うだけではなく、より創造的に活用する手法を共有することをねらいとした。

ながれ

①グループごとに、写真を使ってできる活動を書き出し、発表
②グループごとに、写真セットを使って、具体的な活動案を考え、発表
③写真教材の限界や危険性、写真教材を使う際に必要な配慮などについて意見交換

紹介者コメント

実際に多くのNGOが写真を教材として活用している中で、1枚の写真が持つイメージをより有効に活かすことができるようにしたいと思っている。私たちの「伝えたいこと」が写真で伝えられているのか、チェックしてみても良いと思う。

●「写真を使ってできる活動」で出された意見●

＊写っているものをつぶさに観察し、書き出す
＊写真を見て疑問を出し合う
＊写真を見て想像する。お話をつくる
＊何枚か使ってストーリーづくり
＊キャプションをつくる
＊題名をつける（同じ写真でもグループによって違う題をつける）
＊一部を隠した時と全体を見た時の違い
＊小さい部分を見る→全体を見る
＊様々な違う国の家族の写真を比べてランキング（幸せランキングなど）
＊たくさんの中から「キーワード」「思い」で選ぶ
＊たくさんの写真を分類する
＊生活の一部を見せて関心を持つ（見慣れない道具など）
＊ロールプレイのイメージを持ってもらうときに使う
＊自分と同じところ、違うところを探す
＊ごみ山など問題状況の写真の昔と今を比べて未来を考える
＊国を当てる
＊いくつかの写真の中から共通のものを探し当てる
＊絵合わせゲーム
＊子ども自身に写真を撮らせる
＊あるテーマで、いろいろと撮ってみる

●写真セットを使った活動案の発表●

ビナちゃんの1日

ネグロス島に住む10才の少女、ピナちゃんのくらしを写した10枚セット。「ネグロス・ボックス」と共に貸し出しています。

制作：ネグロス・キャンペーン岡山
TEL：086－2331－3778

【印象】
＊どの写真も笑顔
＊仕事をしている写真が多い
＊引いた（全体がわかる）写真が欲しい
＊家族の写真が欲しい
＊学校の写真が欲しい

【活動案】
①写真を時系列（時間を追って）並べる
②自分の一日と比較する
③自分と違う部分を取り出して、なぜ違うのか理由を考える
④そこからフィリピンを考える

アーウィン君の1日

マニラ近郊に住む8才の少年、アーウィン君の家族と一日（遊び、学校、宿題、手伝い等）を撮った20枚セット。「フィリピン・ボックス」と共に貸出している。

制作：ピナツボ復興むさしのネット
TEL：0422－34－5498

【印象】
＊被写体の表情が自然
＊食事風景があれば良かった
＊寝ているところ

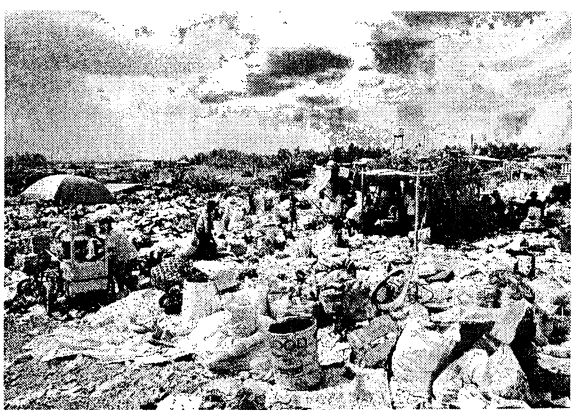
【活動案】
目的：小学生による日比の比較
①特定の写真を見て空欄を埋める
（○○が△△をしているところ）
②6枚の写真を使って学校生活のストーリーをつくる
③自分の学校生活と比べる
④発表
⑤解説
⑥ふりかえり

テーマ② フォト・ランゲージ

JICAフォトランゲージキット

世界7カ国計35枚のうち、フィリピンの写真は5枚（映画雑誌を見る子どもたち、制服姿の高校生、ごみ山、高層ビル、試験農場）

発行：国際協力機構（JICA）国内事業部
全国のJICA国内機関で貸出（無料）
URL：http://www.jica.go.jp/worldmap/



【印象】
＊同じ構図の写真が3枚
＊対比（ビルとごみ、お嬢さんと男の子）
＊人が写っているのが少ない

【活動案】
①班ごとにフィリピンの具体的なイメージを挙げる
②写真（1グループに1枚）を配る
③挙げたイメージとの違いと合っていたところを話し合う（ディベート形式）
④発表
⑤ふりかえり（なぜ最初のイメージと違っていたのか）

NEWマジカル・バナナ補助教材CD版

クイズの問題や回答用のグラフ、バナナに関する写真資料ほか子どもの暮らしや町。村の様子、食などをテーマにした写真約60枚。
CDからプリントアウトして、又プロジェクターを通して利用可。1000円。

制作：地球の木　TEL：045－228－1575

【印象】
＊系統が似ている
＊乗り物、主食、建物の中、町の中心、教会、子どもの遊び等の写真があると良い
＊生活が見えづらいので、教科書などの生活用品の写真があるとよい

【活動案】
＊何を売っているのか部分隠し
＊1日のストーリー
＊制服の写真から思ったこと
＊国当て
＊日本の小学校との違い探し

地球の仲間たち【フィリピン】ドン君

ボホール島に住む11才の少年、ドン君の家族、学校、遊びなどの5枚セット。

制作：開発教育を考える会
TEL：0462－56－0435（臼井）

【印象】
＊5枚の写真のバリエーション
＊フィリピンのステレオタイプを壊すには有効だが、フォローアップも必要
＊市場の写真－売っているもの、表情がわかるぐらいアップに
＊一家の紹介がほしい
＊説明にある「トライシクル・ジープニー」とは？

【活動案】
＊これはどこの国でしょう？それはなぜ？
＊日本と同じところ、違うところ
＊市場の写真－食の紹介
＊何が写っているか、これは何？
＊隠す－これは何をしているの？

●写真教材のリスクと配慮についての意見交換で出された意見●

【リスク】
＊「貧しい」イメージの固定化
＊多様性が伝えられない
＊これがすべて、と思いがち
＊全部を教えられない
＊イメージができあがる
＊日本の側だけが「撮る」

【配慮】
＊バランスをとる（選択）
＊多様性に配慮
＊経験や説明、別の展開がフォロー
＊目的意識、つくる側の価値観
＊「限界」を認識しておく
＊物語（ストーリー）を
＊対象を配慮（年齢、経験など）
＊日本のことを伝えるとしたら…と問いかける
＊フィリピン側からの問いかけに答えてみる
＊自分の生活を振り返るしかけ

テーマ② フォト・ランゲージ

●アンケートから●

＊少人数で具体的に考える時間があってよかった。参加者の中からうまく情報を引き出して交換することができた

＊フォトランゲージの色々なやり方が紹介されて参考になった。どういう基準で写真を選んだか、などフォトランゲージを作る場合の検討もあったらよかった。

＊フォトランゲージそのものについてのブレインストーミングをしたのがよかった。写真教材は、それぞれ写真の撮り方に視点の違いがあって、比較すると、それぞれ伝えたいものがわかった。自分が次回、外国に行ったときにこういうものを撮ったら面白い、ということもわかった。

＊フォトランゲージについては、なんとなくしかその意味合いとか使い方を捉えていなかったが、今回のセッションでとてもそれが明確化して、今後の教材に反映できそう。とてもおもしろかった。

＊フォトランゲージにテーマをしぼっていろいろな使い方を検討する点、写真を比べてみる部分、とても参考になり、この手法に対する理解が深まった。
(アーウィン君)写真が生き生きと撮れていて、好感を持てた。教材を作りたいと思う人たちが撮った優位性があると思った。
(地球の仲間たち)初期に作った作品とのことで、フォトランゲージに使うには、フォトアングルが改善を必要とすると感じた。そのことでかえって自分が写真を撮る時の参考になった。(JICA)さすがと思うほど、プロフェッショナル。

＊このセッションのすぐ後にボビーさんから次の日にやったようなコメント(彼が伝えたいフィリピン、どんな写真を入れるとよいか等)が聞けたらより良かった。

＊写真教材についてじっくり考える時間が持てて貴重だった。グループワークで意見交換、発表、といろいろな人、世代の考え方を聞けたのが良かった。もちろん、ベテランファシリテーターの福田さんの総括のみごとさにも感謝。いろんな教材が見られたのもラッキーだった。

＊(アーウィンくん、ビナちゃん、地球の仲間たち)撮った人の対象への思い入れがあるだけに、共感を伝えやすい反面、オリエンタリズムに陥らないようにするのが難しい。(JICA)逆に一人一人の顔が写っている写真が少ないので生きている人間への共感を呼ぶような伝え方ができず、貧しいフィリピンという偏見を助長しない工夫が必要。一人の一日と、社会全体の間をつないでバランスを取れるようなフォトランゲージの使い方を今後の課題としたい。

＊実際に応用するための参考として良かった。実際にやってみる、という経験も良かった。フォトランゲージに使うためにはそれだけの題材を含んだ良い写真が必要ということが分かった。

＊いきなり見ず知らずの人と教材をつくるという体験が面白かった。フォトランゲージという手法の重要性は分かったが、何が伝わらないのかという点については深められなかった点が残念。

＊「子どもの生活を伝える」という視点で、どのような写真が入って欲しいかは一般化できるものとして得られたのではないかと思う。

＊他団体(JCNC岡山以外)のキットはちゃんと解説や使い方のポイントが示されていて誰でも使えるようになっており勉強になった。

アイスブレーキングいろいろやりました

7－UP

◆全員で一つの輪になって立つ。
◆リーダーから、右手で左肩（または左手で右肩）を叩きながら、「1」と言う。左肩を叩いた場合は、リーダーの左隣の人（右肩を叩いた場合は右隣の人）が「2」と言いながら、右手で左肩か左手で右肩を叩く。このように、叩いたのが右肩の場合は右隣、左肩の場合は左隣の人が、続きの番号を言いながら、続ける。
◆「7」がつく数字（7、17、27…）および「7」の倍数（14、21、28…）の時は、その番号を言わずに「7－UP」と言わなければならない。失敗したら、「1」からやりなおします。

by ボビー・ガルシア

タコvsタイ

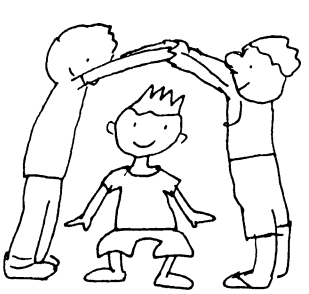
◆二人組みで握手し、どちらがタコでどちらがタイかを決めます。
◆リーダーが、「タタタタタタタ…タコ！」あるいは「タイ！」と言います。
◆「タコ」と言われたら、タコの人が空いている手（左手）でタイの人の手の甲をたたこうとします。タイの人は、手の甲をたたかれると痛いので、左手の平で自分の右手の手の甲をガードします。
（「タイ」と言われたらその逆です。）
◆「タタタタタタタ…タイヤキ！」とか、「タンボ！」とかフェイントもOK！

by 角田望

いえ・ぶた・あらし

◆リーダーを一人決め、あとの人は3人組を　つくる。二人は「家」役で、向かい合って立ち、互いの両手をつないで高くあげる。一人は「ぶた」役で「家」の間にしゃがむ。
◆リーダーが「家・ぶた・嵐、家・ぶた、嵐」と繰り返し言い、最後に「家」「ブタ」「嵐」のいずれかを叫ぶ。
◆家→「家」役の人は全員、つないだ手を離し、ほかの「家」役の人と新たなペアになり、「ブタ」の上に家をつくる。
ぶた→「ぶた」役の人は全員、「家」から離れ、別の「家」の中に入ります。
嵐→3人組を解体し、それぞれ新たな3人組をつくる。
◆リーダーもさっと入るので、余った人が次のリーダーになります。

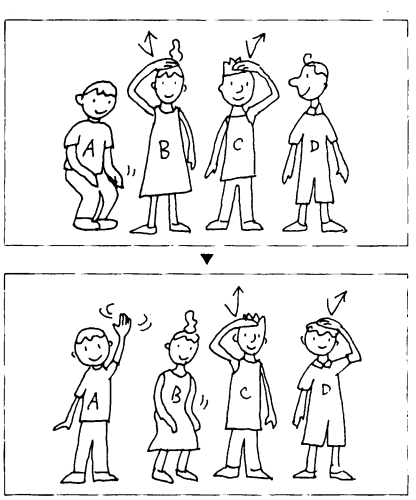
by 出口雅子



サギディ・サギディ・サッポッポ

◆全員で一つの輪になって立つ。
◆リーダーを一人決め、全員で「サギディ・サギディ・サッポッポ」と繰り返し歌う。
◆リーダーは「サギディ・サギディ・サッポッポ」の1フレーズの間、何らかのアクションをする。
◆リーダーの右隣の人は、次の「サギディ～」でリーダーのアクションをまねる。その間、リーダーは次のアクションをしている。
◆次つぎにリーダのアクションを「伝言ゲーム」のように伝えていく。
◆どんどんスピードをあげていく。

by 出口雅子



テーマ③ 環境・開発

海から見える環境と貧困ゲーム

紹介者：町田寛典（草の根援助運動学生班／P2ユース）
TEL:045－772－8363　FAX:045－774－8075

●教材紹介●

ねらい

日常、実感し難い「国際問題」と私たちとの「関係深さ・身近さ」を楽しく体験する。「日本」と「フィリピン」を舞台に役割を演じることで、人々の思いや国の「つながり」を体感し、それによって起きる環境や貧困の問題などについて理解を深める。

ながれ

①参加者を2グループに分け、さらに各グループの中で「日本の家族（父・母・子）」「フィリピンの家族（父・母・子）」「仲介者（2名）」の役を決める

②両「家族」に魚・エビ・お金・マンゴローブのカード、ルールシートなど、「仲介者」に「運命カード」、お金・魚のカードなどを配布。各自ルールを読む。

③両家族はお互いが見えない状態で、それぞれお金を使って一日一回魚かエビを買い、3日間生活をする。両家族は1日の始まりに「運命カード」を引く（フィリピン側は「豊漁」「子どもが学校に行きたい」など、日本側は「旅行に行く」「シャンプーする」など）

④日本側は日本の魚かエビ、フィリピンの魚かエビの4つの選択肢がある（フィリピン産の方が安い）。フィリピン側はマングローブ・カードを持っている限り、日ごとに魚が増えるが、マングローブ・カードは換金もできる。また魚かエビが買えない日は「栄養失調」カードが渡され、二回目には「病気」カードになる。

⑤ゲーム終了、両家族の状態を確認し、ルール表を読み比べる。

⑥ふりかえり・解説

コメント

中高生に授業をするにあたり、フィリピンで暮らす人びとを「自分たちとは異なる人たち」と思ってしまうのではなく、「自分達と深く関わっている人たち」と感じてもらうことを重視しました。その分、教材としてまだまだ不十分なところも多く、発表当日は、参加者の方から多くの指摘を頂き、感謝すると同時に、よりよい教材に発展させるために、参考にさせていただきます。ありがとうございました。

●参加者からのコメント●

GOOD!

＊フィリピンの生活と日本の生活を結びつけたゲームであることがとても良かった。日常の行動がいかに他国の貧困・環境破壊がつながっているかを感じ、疑問を持つきっかけとなる。

＊1つのゲームでもりだくさんのテーマについて触れられるのが素晴らしかった。

疑問・反論

＊フィリピンの金持ち、日本の失業者（たとえば、お父さんがリストラされる）など入れたらどうなる？

＊「どう問うか」が重要。ラフなコメントを求める時と、ある種のフォーカスをするために質問をする場合、その整理をしてもよいのでは？

＊日本が魚を買うことが「悪」みたいなイメージを描かれやすい？それで収益を上げているフィリピンの漁民もいるのでは？

提案・改善

＊木材など、他のものにも応用できる。

●アンケートから●

＊ゲームという手法はやはり興味を引くという点で非常に有用。開発するのは大変なので、一度開発したらこういう場でどんどん共有して改善していけると望ましい。目的が限定されていることを伝えて使えば非常に良くできたゲームだ。

＊シンプルなゲームからあれだけいろんな論点を出せることがおもしろかったが、シュミレーション的な教材をつくる難しさも感じた。あれだけつくるのは大変は労力だったことと思う。

＊おもしろい教材。高校で展開するには良い教材だと思ったが、連絡係があまり面白くない（高校生だと疎外感を感じるかもしれない）と思った。

＊よく考えられたゲームだったが、世界の現実を伝えるだけでなく、シュミレーションの中の人物としてゲームする人はどうだったのか、の振り返りもあると良いのではないか。

＊新しいゲームを紹介してもらって良かった。わかりやすく、よくできたゲームだと思った。学生さんたちが、自分たちの支援の中から作り上げたゲームだというところがとても良い。

＊よく工夫されていた。発展途上国の人々の気持ちがよくわかり、日本人のちょっとした身勝手さが彼らの生活を圧迫するということが子どもにもわかるゲームだと思う。ただ、ボビーさんが気を悪くされなかったか気になった。

＊大学生たちの試みは将来に大いに期待が持てる取り組みだった。ゲームはとてもおもしろく、多方面のことを考えるきっかけを作るものだった。説明を簡略にする工夫をするとさらに良くなると思う。

＊自分たちで考えてここまでのものを作り上げるなんてすごいと思った。バリエーションもきくし、いろんな広がりができる。

テーマ④ 平和・人権

戦争と女性を考えるワークショップ

紹介者：出口雅子（フィリピン元「慰安婦」支援ネット・三多摩）
TEL:0422－34－5498　FAX:0422－32－9372（ピナット気付）
※「戦争と女性を考えるワークショップ・キット」は貸出可（利用料3000円）。

●教材紹介●

ねらい

第二次世界大戦下、14歳で日本軍の「慰安婦」にさせられたフィリピン人女性、レメディアス・フェリアスさんの人生に触れ、一人一人が感じ、考え、表現することで、「慰安婦」問題を身近に引き寄せて考える。また、そこから世界各地で現在も続く戦争や性暴力、歴史教育のあり方などについて、ジェンダーの視点に立って考える姿勢を養う。

ながれ

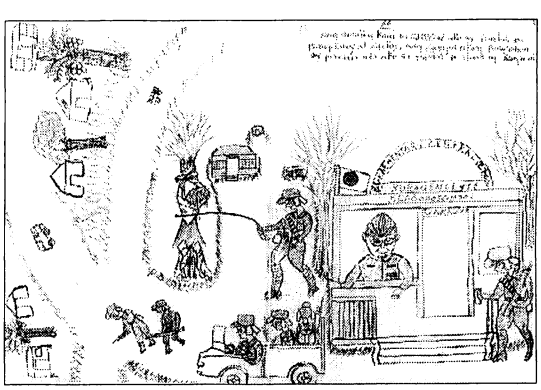
①自分の14歳を思い出し、ペアで紹介
②各ペアに、スケッチ各1枚を配り、ストーリーを考える
③本当のストーリーを配り、スケッチの番号順に発表する（幸せな日々→戦争が近づく→日本軍に捕らえられ駐屯地に連れて行かれる→毎日のように強姦の被害に→米軍に救助される→家族と再会するも…計11枚）
④レメディアスさんのビデオ（01年）を見る
⑤ふりかえり。一人ずつ「感情カード」を記入した後、ペアで共有

紹介者コメント

本当は、③のあとにいったんふりかえりを入れた方が良いが、今回は時間がなかったので省略した。

このワークショップは、これまでほとんど教えられずにきた日本軍の行為を扱い、参加者を深く揺さぶり、重い気持ちにさせてしまう。また性暴力という非常にセンシティブなテーマを取り上げているため、自分の本当の感情や考えを皆の前で表現することに抵抗を感じる人もいる。そのため「ふりかえり」の進め方に工夫が求められるワークショップである。

※本ワークショップは、『もうひとつのレイテ戦～日本軍に捕らえられた少女の絵日記』（レメディアス・フェリアス著、竹見智恵子監修、ブカンブコン、1999）をもとに作成されました。



●参加者からのコメント●

GOOD!

＊私自身知らないことが多くて、やっぱり経験者の人の話はリアルだと思った。人に自分の経験を話すのは本当に勇気のいることなのだと感じたけど、同時に伝えることの大切さも感じた。

＊とても色々なことを考えさせるワークショップだと思います。ファシリテータの力量が問われるでしょうが…。

＊深く考える（自分に対しても、社会に対しても）教材

＊絵ランゲージは、写真とはちがう主体的なメッセージのリアルさがすごかった。

＊絵を使うことで進行がうまく行きやすいと感じた。

疑問・異論

＊感情カードを最後に出すのだったら、ポジティブなものもあった。

＊ファシリテータを選ぶのか？誰もができる素材ではないのか？

＊男性がどう感じるか知りたい。

＊他国は慰安婦に対して保障しているのか？

＊対象によってメッセージがかわる？

＊未来へつなぐ視点をどうするか？

提案・改善

＊声をもつこと→他の教材化にも生かせる？

＊当時の日本の報道と合わせる→戦争報道の見方につながる？

●アンケートから●

＊とても印象に残った。つらいテーマだったが、与えられた1枚の絵をじっくり見て、その絵の持つ力に圧倒された。余韻が残るワークショップだった。

＊今回のセミナーで一番衝撃的だった。参加者の感情にここまで迫る実践が可能な場がどれくらいあるかは考えなくてはならないが、実際に使用するかどうかは別としてもこういう実践があるということ自体をもっと共有していくことは有用だと思う。同じようにセンシティブな他のテーマで応用可能な、ソフトバージョンが考えていけたらよりよい。

＊一参加者として、普段あまり深く考えないテーマだったので、考えさせられた。あの本（もうひとつのレイテ戦）を見たときに、とても良い本なので、ぜひもっと他の人にも読んでほしいと思ったのだが、こんな方法があるのかと思った。

＊二次被害の話し、私の出身校で起こった事件などから振り返りができたのが良かった。フィリピンだけでなく、現在の日本の問題にどうつなげるかが、社会科教員としては重要かなと思う。

＊私にとっては新しいタイプのアクティビティだった。ファシリテーションからも学んだ。全体に教材に意識がいっていたが、ファシリテーションとしてどうかという視点でも考えられたかもしれない。

＊自分の14歳の頃を考えて、慰安婦にされた女性とつながる、という方法はとても効果的。もし、あの頃の自分にそんなことが起こったら、と考えると、いかに残酷なことだったかがよくわかる。

フィリピンを学ぶ視点～最近の動向から

ボビー・ガルシア
（PEPE=Popular Education for People's Empowermentディレクター）

第4セッションでは、フィリピンの民衆教育に長年携わってきたボビー・ガルシアさんに、今回取り上げた教材についての総括や、参加者からの質問に答えていただいた。

ボビーさん自身も、今回のワークショップを通して、多くのことを学ぶことができた、と言う。特に写真を使った活動にさまざまな方法があることを知った、とのこと。

写真教材は、写真そのものをじっくり観察することの大切さと同時に、写真に写っていないもの・状況を見ようとすることの重要性が指摘された。

「戦争と女性を考えるワークショップ」や「貧困と環境ゲーム」におけるファシリテーターの役割として、ワークショップが参加者に与える影響を認識しておくことや、予測しない展開に対してオープンであることの大切さが指摘された。

「フィリピン人として、フィリピンの何を知ってもらいたいか」という問いへの答えは、「ピープルズ・パワー」。

スペイン、アメリカ、日本、と常に「権力」に対する闘いの歴史を持つフィリピン。現代史の中で、民衆が自分たちの力で政変をもたらした「ピープルズ・パワー」が2度、起こった（1986年マルコス独裁政権を倒した政変および2000年エストラーダ大統領を失脚させた政変）。ボビーさんは、フィリピンの歴史を簡単に紹介しながら、その中で市民社会がどう政治に関わってきたのか解説。政党の違いや、分裂の過程などについても詳しく説明してくれた。

「ピープルズ・パワー」を表すことができる写真はどんなものだろうか、との問いには、「選挙ポスターが貼られた壁」や「デモ」の写真、という提案があった。

そのほか、フィリピンを表すキーワードとして、「農地改革」「センス・オブ・ユーモア＝生き残るための手段？？？」「テキスティング（texting）＝携帯電話でのメールのやりとり」などが挙げられた。

ボビー・ガルシア氏

●アンケートから●

＊フィリピンの事情にあまり詳しくなかったので、その一端に触れることのできる密度の濃い情報交換ができた。教材対象国の人が、そこの人の見方を代表できるとは限らないが、教材化するものの視点だけでなく、教材化される側の視点をもっと取り入れていくことが国際理解教育の今後に重要だと思う。発言者が偏っていたので、もう少し計画的にまとめられると良かったかもしれない。

＊ボビーさんから、フィリピン人当事者としての視点でいろいろなお話しをきけたことは良かった。やはり、マニラの人であっても普段お付き合いしているネグロスの人たちと同じで、植民地としての歴史→社会変革運動、というところが根っこにあるんだなと再認識した。
また、フィリピンをあらわすキーワードが「Sence of humor」だというのも、なるほどなぁと面白かった。先日会ったネグロスのＮＧＯスタッフは、「立ち向かうべき問題を、笑ってごまかしてしまう悪い面でもある」と言っていたが。
ただ、振り返り、まとめとしてはやはり十分でなかったと思う。宿泊場所に比べて会場が少しフォーマルで、自由に意見を言い合うのにちょっと壁があった感じも受けた。また、長丁場になって皆少し疲れていたこともあると思う。

＊個人的にはフィリピンの社会状況がわかり非常に面白かった。大学生の参加者が、ボビーの思いを共有できていないのかなと思った。世代的に仕方ないのかなと思ったが、やはり教材にしても政治的な振り返りが重要なのではないかと思う。

＊フィリピンにあまり深く関わっていない者としては、お話の内容が専門的だった。というより、お話は貴重なものだったが、このセッションの役割が十分に果たせなかったのではないかと思う（伝えたいことが伝えられているのかの検証）。

＊ボビーさんの話が最後に聞けてよかった。最後に私が言ったことが司会者にうまく伝わらず、話が違う方向に行ってしまい残念でした。ワークショップを行った後、参加者（特に学校の児童・生徒）に伝えたいことがどの程度伝わったかを評価する方法をまたの機会に話し合いたい、という提案をしたかったのですが…。

在日フィリピン人で元小学校教員の原島メイグレースさんにもリソースパーソンとしての参加をお願いしていましたが、原島さんの緊急のご事情により、当日になって参加ができなくなりました。原島さんのお話しを期待して参加された方には大変ご迷惑をおかけいたしました。

ポピュラーエデュケーションの潮流

※ガルシア氏がフィリピンで取り組んでいる「ポピュラーエデュケーション」について、
当日お話をゆっくり聞く機会がなかったため、寄稿していただきました。

ボビー・ガルシア
（PEPE=Popular Education for People's Empowermentディレクター）

すべての人びとのPop Ed

ポピュラーエデュケーション（以下「Pop ED」）は、共同の学習で、その意味は、簡単に言えば、あらゆる人びとの関与を得て、知識を共有するということです。学習者は、どこか別のところでつくられた知識の、受動的な受け手ではありません。学習者は、自らの経験を基盤として、知識をつくりあげる担い手です。

Pop ED では、教師と生徒の区別は、はっきりしたものではありません。また、集団による共同の営みにある、きわめて大きな潜在的な力が発揮されるのです。さまざまな、表現や言語を使うことが可能とされ、もの語りを演じることができるようになるのです。教師と生徒という関係の場合よりも、すべての人がより豊かに多くの知識を提供し、また得ることになります。

Pop ED は、経験から学ぶようにしていきます。それ以上に、世界や生活、そして現実の意味を理解し、現実の真の理解こそが、変革につながるのです。

Pop ED は、不平等な権力関係に批判的であり、挑むものです。また、弱者の側にあります。力が奪われるということが、工場で、職場で、教室で、さらに地球規模でまた、恋人同士でも起こっています。Pop ED の役割は、権力関係において、不平等な権力関係の覆いをとりのぞき、その関係を変えることです。

しかし、これで Pop ED を定義したことにはなりません。さまざまな視点がぶつかりあい、もつれた網の目をつくるようなものです。

Pop EDの特徴

しかし、次に、Pop ED について多くの人が合意している点をあげてみましょう。

・これまでの伝統的な考え方に疑いをもつ
・批判を受け入れる
・人間の尊厳と人間性を回復する
・自らの現実の存在に対して、問いをもつ
・間主観性を支持する
・非合理性の重要性を認める
・理性と感性の双方を取り込む
・創造的で、反省的になる
・全体主義の考えを退ける

ここで、これらのすべての点について、明らかにする余裕はありません。Pop ED の定義について、答えを得るというよりは、定義をしてみて、さらに問いがでてくる、というような動的な過程としてとらえておくので十分ではないでしょうか。

新たなパラダイム

Pop ED は、NGO でよく使われますが、革新的な、参加型教育をすすめようとする学校や教師も取り入れるようになってきています。これまでの教育と、Pop ED のパラダイムは、教育学においては、相いれないのが、現状です。他

方、Pop ED に影響を受ける教育行政関係者もあるようです。Pop ED の理解は、意識化や主張であり、正しい実践の尺度でもあり、ものごとをなすことでもあるのです。

２つの教育のあり方

演繹的と帰納的の2つの教育のあり方があります。演繹的なあり方は教師中心で、知識は教科書に書いてあるもので、抽象的、理論的なやり方です。帰納的なあり方は、学習者中心で、知識は学習者の中にあり、具体的で実践的なものとします。誰も知識を独占しないのです。誰もが知識を持っているという信念に基づいており、学習者は空っぽで知識を注入する、といった伝統的教育観からの転換なのです。

Pop EDの源流

パウロ・フレイレが、Pop ED の現在の潮流の源にあたります。彼は 1960 年代、ブラジルの農民の識字教育のプログラムに携わっていました。それまでのエリート主義の教育制度によって対象を選別するのではなく、フレイレは共同するための、根本的な問題を話しあうことから、読み書きを学んだのです。この行うことから学び、さらに行う、という一連の過程が、プラクシスだとされました。プラクシスは中南米に広がりました。フレイレの最後の著作、「希望への教育学」は、きびしく鋭い教育者としての経験や、いかにその哲学が形成されたかが示されています。

コンテキストとコンテント、メソッド

Pop ED は、コンテキストとコンテント、メソッドの統合をはかる教育を目指します。コンテキストで大事なのはまず、地域、対象者のニーズを知ることです。内容が、人々の経験に根ざすことが大切で、コンテキストに内容が合っている必要があるのです。

地域開発で「あなたは必要ない」と住民から拒否されたのでは、意味がないのです。地域に行って、実際に相手を知り、関係をきずくことです。相手との信頼関係をつくり、言わば、創造的な関係を築くことがプログラムの第一歩なのです。

フィリピンで Pop ED が有効なのは地域に根ざしているからなのです。

学習の特徴

態度、技能、知識の3つが経験的に結びつき、一般の人びとをエンパワーすることにつながります。

学びの果実を実らせるもの。自分を知り、変革への責任を持ち、人々とともにあり、集合的な学びをつくり、ホリスティックな精神性を持つことがファシリテーターの役割です。

その際、批判的思考のもとに問題の根元を分析し、行動につなげるようフレームワークをもつことが大切です。ジェンダーへの平等、社会変革、社会正義、持続可能な開発、潜在的可能性の実現、そして最も大事な「その他」(これを見つけるのが大事)。ここでもコンテキストが問われることになります。

学習のプロセスは ADIDAS という頭文字で示され、Activity（活動）、Discussion（討論）、Input（提示）、Deepening（深化）、Analysis（分析）、Synthesis（総合）という要素があります。それらは、一連の流れとしてモジュールを構成し、実行可能で、明確な目標があり、対話的、有用で、学習中心で、経験的な方法をとるのです。

プログラム内容

1月17日(土)	15:00	セッション①　バナナを通して 教材検討1　「バナナお絵かき合戦」 教材検討2　「NEWマジカル・バナナ」
	18:30	セッション②　写真を使って 教材検討3　「ネグロス・ボックス」より 教材検討4　「フィリピン・ボックス」より 教材検討5　「地球の仲間たち」より 教材検討6　「JICAフォトランゲージキット」より
1月18日(日)	9:00	セッション③　空間的、時間的な視点 教材検討7　「海から見える環境と貧困ゲーム」 教材検討8　「戦争と女性を考えるワークショップ」
	13:00	セッション④　ふりかえり

参加者一覧

1	安部理恵	パクパク・ナティン
2	有竹正寿	ネグロス・キャンペーン岡山
3	臼井香里	開発教育を考える会
4	榎本泰子	県立成田国際高校
5	遠藤康子	パクパク・ナティン
6	大垣菜都子	慶應義塾大学／世界銀行学生開発教育チーム
7	菊地恵子	大東文化大学ほか
8	木野美穂	国際理解教育センター
9	久志本裕子	東京学芸大学大学院
10	佐藤朋子	JICA東京国際センター
11	佐藤育代	パクパク・ナティン
12	白井宏明	JICA東京国際センター
13	鈴木隆弘	JCNC開発教育チーム
14	角田　望	日本ネグロス・キャンペーン委員会
15	出口雅子	ピナツボ復興むさしのネット
16	戸田香苗	多文化共生センター・ひょうご
17	冨岡紀子	開発教育を考える会／やしの実の会
18	戸水幸子	小学校教員
19	長澤真衣子	丹波グリーンフォース／IKGS緑化協会
20	中野真理子	地球の木
21	福田紀子	FARM
22	町田寛典	草の根援助運動学生班(P2ユース)
23	丸谷士都子	地球の木
24	溝部　学	
25	八木亜紀子	ピナツボ復興むさしのネット
26	横川芳江	地球の木
27	吉濱晶子	JCNC開発教育チーム
28	ボビー・ガルシア	PEPE, IPD, PATH, ASPBAE

関係団体連絡先

◆開発教育を考える会

〒228－0001
座間市相模が丘3－29－1
TEL:0462－56－0435
FAX:0462－55－1867
E-mail : chikyu@group.email.ne.jp
URL : http://www5a.biglobe.ne.jp/~chikyu/

◆草の根援助運動

〒235－0036
横浜市磯子区中原1－1－28
労働総合センター3F
TEL:045－772－8363
FAX:045－774－8075
E-mail : p2aid@angel.ne.jp
URL : http://www.angel.ne.jp/~p2aid

◆(特活)地球の木

〒231－0032
横浜市中区不老町1－3－3
フェニックス関内2F
TEL:045－228－1575
FAX:045－228－1578
E-mail : CZR10753@nifty.ne.jp

◆日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)

〒169－0072
新宿区大久保2－4－15
サンライズ新宿3F
TEL:03－5273－8160
FAX:03－5273－8667
E-mail : jcnc@jca.apc.org
URL : http://www.jca.apc.org/jcnc

◆ネグロス・キャンペーン岡山

〒700－0825
岡山市田町1－7－28
岡山バプテスト教会気付
TEL:086－231－3778

◆ピナツボ復興むさしのネット(ピナット)

〒181－0014
三鷹市野崎3－22－16
すぺーすはちのこ2F
TEL:0422－34－5498
FAX:0422－32－9372
E-mail : hachinoko@green.livedoor.com
URL : http://hachinoko.ld.infoseek.co.jp

◆フィリピン元「慰安婦」支援ネット・三多摩

同上(ピナツボ復興むさしのネット気付)

主催団体

◆グローバル英語教育研究会(AGEnT)

〒330－0065
さいたま市浦和区神明2－15－3－104
TEL/FAX:048－825－1006
E-mail : kasa@sainet.or.jp
URL : www.sainet.or.jp/~kasa

人権、開発、環境、平和といった地球規模の問題を英語で学ぶことを構想ている。教材内容はもとより、グローバル教育で強調される、協同学習などの手法も追求している。97年より、フィリピンへのスタディツアーを続けている。また、適宜、ワークショップ、セミナーを行っている。

◆FARM

〒203－0053
東久留米市東本町3－1－41－712
TEL/FAX:0424－72－6393
E-mail : farm@cnet-tc.ne.jp

国内外での公正な地域づくりやジェンダー等の参加型ワークショッププログラムの企画実施。フィリピン教育交流ツアーを毎夏おこなっている。

フィリピンの学び方

…わたしたちが、伝えていること、伝えたいこと…

発行日：2004年3月30日

編集：福田紀子・出口雅子

発行：グローバル英語教育研究会（AGEnT）

〒330-0065 さいたま市浦和区神明2-15-3-104

TEL/FAX：048-825-1006　E-mai：kasa@sainet.or.jp

助成：国際交流基金アジアセンター草の根交流事業事業